

## 第5回 魅力ある府立高校づくり懇話会 (概要)

### 1 日 時

令和5年2月28日(火) 午前9時30分～11時30分

### 2 場 所

京都産業大学むすびわざ館 3-A (3階)

### 3 出席者

- 委員 10名(欠席2名)
- 教育委員会 前川教育長、木上教育次長、村山教育監、大路管理部長、吉村指導部長、村田指導部理事、相馬高校改革推進室長、石澤総務企画課長、片又高校改革推進室参事 他

### 4 概 要

- 事務局からの説明
- 意見交換

---

#### ■事務局からの説明

#### ■意見交換(主な意見)

◆：座長      ○：委員      □：教育委員会

○前回の会議での、市町が府立高校に配置している地域コーディネーターについて補足する。京丹後市においては、市の会計年度任用職員である「地域おこし協力隊」の地域コーディネーターを、市内にある府立高校、峰山高校・丹後緑風高校・清新高校の3校に配置をしている。学校教育の視点だけではなく、地域の資源を捉えながら、高校生の意識の変化や気づきを促す、高校と地域社会の架け橋としての役割を担っている。同様の形で、与謝野町でも宮津天橋高校加悦谷学舎に地域コーディネーターが配置され、地域と高校とを繋ぐ役割を果たしている。

□少子化を見据えると、高校の統廃合なども検討していかざるをえない状況であるが、教育現場としては、学校を減らすことなどは断腸の思いでもある。これからの京都府の高校教育がどうあるべきかということ、子どもたちの教育を充実させるという「子どもたちファースト」の観点で、地域事情も踏まえながら検討していくことが肝要である。そうした中で、地域事情に応じた適正な学校規模と、地域事情を踏まえて様々なニーズにどう応えていくのかということが、中心となる検討課題だと考えている。高校教育に関わる者の視点だけではなく、中学校、保護者、外部の方の視点から意見をいただくことで、固定化された考えによらない、本当の意味での子どもたちのための高校の在り方検討に繋がると思う。

◆まずは、生徒ファーストの視点を持ちながら、学校が小規模化していくことでの課題や、その中で高校の魅力づくりについて、地域事情も踏まえた御意見をいただきたい。

- 小規模になることで、手厚く指導ができるかもしれないが、部活動や学校行事などにおいて他者との関わりの中で学ぶという要素は、薄まってしまいうだろう。統廃合を過度に進めることはよくないと思うが、多くの高校がある地域では、統廃合に際しても通える範囲で魅力ある学校を選ぶことができる。
- 現在の入学者選抜制度は、子どもたちにとって何度もチャンスがあり、取りこぼさないようなシステムだと思うが、中学生や保護者にとっては分かりにくい制度である。また、住んでいる地域が基本であるため、隣接する地域の通学可能な距離にある学校が志願できない。そうした制限についても見直すべきではないか。
- 中学生段階からニーズに応えるという意味では、中高一貫教育校をもう少し増やしてもよいのではないか。魅力ある高校に中学校段階から入学して、そのまま高校へ進学したいという考え方はあると思う。
- 小規模校では、1人1人に手厚く指導できる部分もあるが、クラス替えなどがないことで、人間関係で支障をきたした時に逃げ場がないということも起こる。また、一定数の集団がある方が、多様な意見や発想を共有しながら学ぶことができる。
- 市町村における中学校の統廃合では、長い年数を要した例もある。地元では、統廃合に至るまで9年かかった。閉校する中学校は、生徒が2人しかいない学年があるような状況であり、やはり様々な子どもたちがいる中で学ぶことがよいという考え方で、地域の方々が理解された。生徒数の状況等がどの程度になれば議論をスタートするかを、決めておいた方がよいのではないか。議論している間にも、子どもたちの学びの場は縮小していき、生徒数が減ることで、部活動等の制限も生じてくる。子どもが1人になっても学校は残して欲しいという考え方もあるが、やはり子どもたちが生き生きとしている地域は活性化していく。地域事情は様々であるので、地域ごとの議論を開始する時期は、一定決めておくべきではないか。また、学校数を減らす際に、学校の建物を残して分校化していくような考え方もあるのではないか。
- 北部地域ほど少子化が進んでおり、府内留学について考えてみてはどうか。農業や水産業は、絶対に衰退させてはいけない産業分野であり、大事な学びの要素が多くある。たとえば、南部地域の生徒が、高校2年生段階くらいで留学できるような制度を、寮の整備なども含めながら考えられないか。生徒間交流による効果も期待できると思う。そのような生徒間の交流をしながら、京都府を1つと捉えていくのもよいのではないか。小規模化していく地域においては、このような柔軟な発想も必要である。選択肢が多くあることで、子どもたちが秘めている無限の可能性を引き出すことができると思う。
- 「生徒ファースト」というのであれば、生徒たちの声を実際に聞いてみることも考えられるのではないか。

- 学校規模については、人数が少ないと安心感もあるが、人間関係は確実に固定化する。同じ学級の中に課題のある生徒が数名存在する場合、40名のうちの数名なのか、10名のうちの数名なのかということでは、集団全体の様子が大きく違ってくる。少人数の集団は、かなり不安定となる。また、目が届きすぎてしまうことによる弊害のようなことも考えられる。
- 適正な規模については、学習面、社会的な活動、ケアの部分など、学校としての機能や役割ごとに分けて考えることが大事である。たとえば、ベースとなる生活集団としての安定性では、ケア的な側面からすると、規模が小さすぎるとは機能を果たせないで一定数が必要だが、多すぎてもいけない。学校行事なども同じくらいの規模感がよいと思う。地域との社会的活動においては、規模が大きすぎると、地域の人たちが全てサポートしきれないこともある。そういう意味では、北部地域は小規模であるからこそ、地域連携を密にできる面があると思う。学習面や部活動などにおいては、一定の規模が必要なので、学校間の連携も大事である。学習面であれば、遠隔による授業の充実を図ることも考えられ、部活動であれば、複数の学校や地域で連携することなどが考えられる。学校の機能と役割を整理していきながら、それぞれごとに規模の大小によるメリットとデメリットを考えることが大事である。北部地域であれば、規模が大きすぎないからこそ逆に地域連携などを密にできるといった強みも、考慮していく方がよい。
- 京都市・乙訓地域など、比較的選択肢が多いところでは統廃合について考えていきやすいとも思うが、生徒減少を見据えた高校の在り方は、府立高校だけではなく、京都市立高校や私立高校の設置者間全体における共通の課題として議論していかないといけない。公立高校だけが縮小して、私学はそのままというのはバランスを欠くかと思うので、設置者間での調整等は必要である。
- 人口減少問題は、高校だけではなく、まちの形の在り方、暮らし方、様々な社会制度なども含めて抜本的に考えざるを得ない。これまでは、人口増加を前提とした拡大志向の中で、制度や仕組みがつくられてきた。よりよい縮小を国全体で考えていくべきフェーズであるが、社会は今までの高度経済成長期以降のモデルを踏襲してしまっていて、その延長線上で縮小を考えてしまうとうまくいかないと思う。創造的な縮小という観点で、府立高校の在り方を学び手や地域を中心に考えていくことが必要である。
- 北部地域などでは、100年に一度の大改革として、人口減少をチャンスに変える発想で、大きく変えていくとポジティブに捉えて、府立高校の再編をしていくことも必要なのではないかと思う。留学という考え方だけでなく、移住型の学び方による高等専門学校もでき始めている。そこにしかない自然資本や都市部ではできない学びがあって、都市部ではもう先がないと思う人たちがその地域で学びたくなるようなモデルを、学び手中心につくっていく発想も考えられる。小規模でも、多様性を認め合いながら、創造的に現代の社会に必要な力を涵養していくようなモデルをつくり出していかないと、単なる縮小に陥ってしまう。子どもの数が減っていくのは明らかで、地域から学校がなくなっていくのを、地域の方が指をくわえて見ざるを得ないような状況になってしまう。危機感は地域にインパクトを与えていく存在でもある。100年に一度のチャンスだと捉えて、そこで学びたい生徒が全国から集まるくらいのモデルを、地域と

連携しながら、特色を出してつくっていくことが重要である。それが結果として、地域に若い世代が増えていくことに繋がると思う。

- 中高一貫教育の視点もよいアイデアだと思う。府内には大学が多く存在することから、中・高・大までの接続による学びがデザインされてもよいと思う。中・高・大連携のようなモデルを、多様な大学の参加のもとに北部地域からまず進めてみることも考えられる。そうすると、生徒自身が興味関心のあることに対して探究的な学習をどんどん進めていくようなスタイルとなり、結果として大学への進路に繋がっていくモデルができるかもしれない。そうした大胆な制度設計を近い将来で考えていかないと、ただ単なる縮小となり、地域にも子どもたちにもメリットがない形になってしまうと思う。
- 学校現場での実態として、学校規模が極端に小さくなると、教育活動の幅が狭まってしまうので、やはり一定の集団規模が必要だと思う。
- 資料2では、確かな学力や豊かな心について具体的な項目が挙げられており、これら両面を養わせることが、やはり高等学校の役割だと思う。その中で、「筆記試験や実技試験等による客観的な評価の対象としやすいもの」として示されている部分の学力を身につけることは、基本的には生徒個人が取り組むことではないかと思う。指針となる教科書があり、カリキュラムがあって、それにより学んでいくことは、自分自身で進めていくべきものである。その上で、同じ方に向けて学びを進めている者同士が集って、刺激を受け合うところに、高等学校の存在意義がある。これが非常に重要で、この部分を失わないために、一定の刺激を受けるための学校規模が必要になってくる。そうした要素からも、6クラスから8クラス規模の集団があれば、クラスの他に、学年を縦に割って行事を行うこともできる。学びを個々に進める中でも、生徒同士が横を見ながら刺激を受けることができる。そういう集団の場での学びを進めていくためには、一定の規模と高校教育としての質が保障されるべきである。
- 学校の規模が小さくなると、教育の質が確保できなくなってくる。一例として、教員の数は学校規模に応じて決まるため、小規模化で教員数が減ると、理科、地歴公民、芸術などの科目の専門教員がいないという状況が起こることになる。たとえば理科なら4科目あるが、理科の教員が1人という学校が出てくることになる。そうすると、教員が専門外の分野を教えることになり、教育の質や多様な進路保障が確保できなくなってしまう。また、教育課程の編成において、様々なコースや選択科目を設定することができなくなる。教育の質の保障という視点から、学校の小規模化によって大きな課題が生じると考える。
- 生徒数が少なくなることで、多様な考え方や価値観などを共有しながら、切磋琢磨する機会がなくなっていく。特に、協働的な学びという視点では、人数が少ないと現実的に支障が生じてくる。
- 子どもたちは、高校には中学校よりもグレードアップしてほしいという率直な思いを持っている。グレードアップの要素は、子どもによってそれぞれである。学習内容の専門性でのグレー

ドアップ、専門的な施設設備など学習環境のグレードアップ、そして学校規模のグレードアップなどがある。単純に人数の多さだけではなく、大人数の中での大規模な学校行事や、部活動などで切磋琢磨できることなどを求めていると思う。

- 高校の規模が小さい地域では、こういった要素でのグレードアップができるのかを考えていく必要がある。専門性や学習環境などで特色を出していかないといけない。少人数だからこそ、こんなことができるという特色を出すのもよいと思う。ただその場合でも、数名の規模では切磋琢磨することもできないので、学校の統廃合等については、一定の目安や考え方の中で論議していくべきだと思う。
- これまで以上に子どもたちは多様化してきている。不登校傾向の生徒や、支援が必要な生徒のニーズを考えると、清明高校、清新高校のような学校の存在は非常に重要であり、「子どもファースト」の対応であると思う。
- 京都市内から、農芸高校や海洋高校を志願する生徒もいる。高校は普通科に行って、それから自分の将来を考えようという生徒も多かったと思うが、最近はオープンスクールなどに参加して、魅力のある高校・学科を選ぶようになってきている。中学校区内にある高校の職業学科を選ぶ生徒もいるので、中学と高校の交流や、地域との繋がりという要素は、非常に大事である。中・高連携だけでなく、小学校・中学校・高校・大学での交流がこれまで以上に大事で、それが地域の活性化に繋がっていくのではないかと。
- 生徒数のボリュームがないと、生徒同士が切磋琢磨することができない。地域活性化と合わせて、子どもたちの学習集団を考えると、統廃合等も検討していくことが大事ではないか。小さな学校が統合することには当然苦勞もあるが、それによって子どもたちが切磋琢磨していけるようになった様子を目の当たりにすると、非常に大きなメリットがあると感じた。
- 府立高校だけでなく、やはり市立高校や私立高校も含めた設置者全体で、生徒減少等の課題を考えていくべきである。府内の高校全体で検討することで、子どもたちの将来に繋げていくことが大事である。
- 多様な生徒のニーズに対する学習集団の在り方については、フレックス学園構想を他地域に展開していくことが重要である。
- 府立高校を選ぶ生徒を増やすこと、多様な家庭環境や中学時代の状況があっても、全ての生徒が不公平のない教育機会を得られる環境を提供すること、高校入学直後から生徒が自身の進路と将来を主体的に考えて、次のステップを選択する風土を醸成することが求められる。そのため案の1つとして、全ての高校において共通で履修ができる動画を配信してはどうか。動画の内容とは、大学進学コース、中学復習コース、キャリア学習コース、高卒認定単位取得コースなどが考えられる。高校2年生の秋ごろまでに自分の希望進路を決定して、3年生では希望に応じた履修プログラムを、どこの学校でも受けられるというようなことができないか。さら

に、夏季休業などに自校及び他校の特別プログラムを履修できたり、保護者も含めたキャリアカウンセリングがオンラインで受けられるといった取組も考えられる。課程や地域を問わず、全ての府立高校がICTで繋がることで、1つの学習集団であるという私立にはないスケールメリットをつくることができるのではないかと。

○適正の在り方が、誰にとっての適正であるかを考える必要がある。小さい規模の学校では、グループに分かれて学習することもできない。また、コミュニケーション面でも、目が届きすぎるということもあり、一定の規模が必要だということになってくる。一方で、大きい規模の高校で苦戦している生徒たちもいる。専門的な学習や実習などでは、小さい規模のメリットもある。大きな規模の学校も一定数必要だが、子どもの特性や学習の専門性という側面から考えると、大きくない学校も必要だと思う。小さな学校でも、場面に応じていくつかの学校と合わさることで、大きな学校のようにできることもある。また、オンラインの活用をすることで、集団規模の大きさや小ささをつくりだすことができる。その両方の中で、適正の在り方を柔軟に考えていく方がよいのではないかと。

○北部地域での、新しいモデルづくりについては、非常に共感する。

◆ここまでの議論をまとめると、まず高校教育においては、小規模化がもたらす子どもたちへの影響を考えると一定の規模が必要だという意見が多くあった。部活動や学校行事も含め、高校生はある程度の規模の集団の中で切磋琢磨することが大切である。学校が小規模化すれば、教科の学習や探究的な学習にも影響があり、多様な進路のニーズに対応していくことも困難になる。また学習集団の規模を確保するためにオンラインを使うという提案もあった。

◆高校が果たすべき役割としては、生徒たちをどのように実社会と接続させるか、人間性や社会性、キャリアデザインをどう身につけさせるかといった観点がある。そうした教育の質を確保するためにも、一定の規模が必要になってくる。望ましい規模については、それぞれの地域特性を考えながら、議論していく必要がある。資料の推計からも、生徒数の減少のスピードなどは、地域ごとに時期が異なる。この時期の区分を見ながら、地域ごとのタイミングを見極め、優先順位をつけて考えていく必要もあるのではないかと。

◆多様な子どもたちに対する手立ても必要である。学力に困難がある生徒、特別な支援が必要な生徒、また学力面などでアドバンテージのある生徒たちに、それぞれどのような環境を用意すべきか。かつて、定時制・通信制の在り方を検討した際に、定時制高校を訪問したことがあったが、「小さすぎるとしんどい」と言った生徒がいた。時代とともに定時制や通信制の役割が大きく変わってきていることも併せて、検討すべきである。フレックス校は現在、京都市内と丹後地域とに1校ずつ設置されているが、他地域にも応用していける可能性はあるのではないかと。また、それが定時制でなければならないのかどうか、慎重に議論していく必要があると思う。生徒たちのことを考えると、全日制・定時制・通信制の併修という考え方や、通信制であっても通信教育で学ぶだけでなく、通学を組み合わせることも考えられる。

- ◆後半は地域事情をキーワードにして、府立高校が果たすべき役割や適正な配置などについて議論をしていきたい。
- 北部地域では、交通の利便性の課題がある。学校同士が離れており、簡単に生徒たちが移動できない事情がある。丹後地域の学舎制の高校では、宮津天橋高校の宮津学舎と加悦谷学舎は比較的距離が近いが、丹後緑風高校では網野学舎と久美浜学舎は一定の距離があって、部活動の合同練習において、時間的な制約があると聞いている。そうした事情から、多様な学びや特別活動ができるある程度の規模の学校をつくっておかないと、子どもたちが求める学びが保障できないことになる。小規模な学校が点在しているのでは、教育効果が上がらないと考える。
- 高校数が非常に多い南部地域では、一定の規模をしっかりと確保していくことが重要ではないか。現在、4クラス規模の学校もあるが、6クラスから8クラスあたりが望ましい規模と考える。同じ方に向けて集団で学ぶ最後の場面が高校段階だと思う。小さいものが組み合わるといふ考え方などによってでも、6クラスから8クラスという規模を基本に考えるべきである。
- 学科・コースの在り方などは、子どもたちのニーズを第一に考えることが必要である。合わせて、統廃合で学校がなくなる地域への影響も、考えていくべきではないか。子どもたちのニーズと地域性に合った高校をとという視点で、再編や存続の必要性を検討していくべきである。
- 南部地域では多くの選択肢があり、私学との競合になっている。その中で選ばれる府立高校を目指していかなければ、定員を充足できない。そうした状況から、規模においても、一定の規模を確保していかなないと、選ばれる高校にはなりにくいと思う。
- 中学生の視点から見て、何を目指してるのかがわかりやすい専門学科などに志願が集まっている傾向が、はっきりとある。普通科がどのような魅力を出していくのかということが、問われていると思う。また、様々な特性や背景を抱えている子どもたちを、府立高校でどのように受け入れていくのかといったことも求められている。
- 北部地域ではやはり、通学の利便性が課題である。バスや電車で通うことになるが、複数を乗り継ぐ必要もある。また運行本数は、1時間に何本あるかというような状況である。通学時間の要素は、子どもたちにとっては非常に大きいと思う。子どもたちが通えるエリアの中に、子どもたちのニーズに合った選択肢があることが必要である。学びたいことが、遠くに行かなくても学べるということが大事だと思う。
- 特に北部地域では、高校や高校生は地域にとって大事な存在だと思う。地域の高校でしっかり教育されている姿が、採用試験でも評価されている。
- これからの社会に必要な人材像、能力は、明らかにこれまでと違っている。大学を卒業して就職したものの、就職した会社を辞めて、違う仕事で成功するケースもある。社会で必要な力が変わってきているということ、率直に受け止める必要がある。答えがあるものにしか対応で

きないような、偏差値型の教育を引きずりすぎると、創造性や本当に生きていくために必要な力が身につかない。学校での成績はよいが、そうした力が弱い子どもたちもいる。これからの社会で求められる資質や能力に照準を合わせる必要がある。

- 地域にとって高校がどういう意味を持つのかということは、もう少し地域社会に問うた方がよいと思う。自治体や地域の産業が、高校教育のためにどのようなリソースを出せるのか。一般論として、高校の存在はあった方がよいと思われるが、現実的な役割などを考えていくと、難しい課題である。高校の存在意義や役割などは、地域政策などとも繋げて考えていくことが重要だと感じている。
- 高校の規模に関しては、カリキュラムを通しての学校から社会への接続という要素だけではなく、組織体としての学校から社会への接続という側面もあると思う。つまり、大きな企業には様々な部署があるように、大規模の学校には複数の多様なクラスがあって、その規模感の中で圧力を感じながら、学校生活を通じて学んでいく。これが従来の中学校から高校へのグレードアップの要素の1つだと思う。創造的減少の発想からすると、ベンチャー型・コミュニティ型といった組織論への発想の転換が非常に大事なのではないか。コミュニティの感覚をどのようにリニューアルしていくかが大事で、これが普通科改革の本丸でもあるような気がする。多様性・専門性での魅力化は、ベンチャー型やコミュニティ型の思考と非常に相性がよいと思う。
- 北部地域では、地域リソースを高校教育に活用しやすい。南部地域などの都市部においては、地域リソースが取り合いになってしまうが、北部地域では取り合いにならない。それが北部地域ではメリットであると思う。ただ、地域政策の中に高校教育に係る政策が入りすぎてしまうと、地域のために投資をしているのだからと、その地域での定住や貢献のみを促すようなことになってしまうことには注意が必要である。教育政策として、地域の活性化に繋げて学びながら、最終的には生徒ファーストの視点で生徒の本当の自立に繋げていく。それによってその地域に定住することもあるだろうし、高校生たちが旅をしながらいろいろな経験をしていくことで地域が活性化していくような構想を考えることが大事なのではないか。そういう意味では、留学という発想も非常に重要である。
- ◆南部地域では、それぞれの高校が専門的な要素を特化していくことが求められているのではないか。また北部地域では、それぞれの地域課題に応えることや、多様性を担保するような学校づくりが必要ではないか。ある大学生の研究では、北部地域の高校で地域課題に特化した探究学習を進めていくと、その地域での定住や貢献への過度な期待をプレッシャーに感じるということである。そうではなく、地域課題を前提にしながらも、地域の方々へ一定の知識還元をして、それがたとえばSDGsなどの大きな社会変革のきっかけに繋がっていく筋道を見せなければ、もっと学びが深まり、広がっていくと思う。地域課題を地域のこととして閉じてしまうと、地域の人材としては育つかもされないが、地域の外を向いて出て行きたいといった視点が抜けてしまうおそれがある。
- 小規模校の小学校で、ICTを活用しながらまちの良さを探究し、それを発信して世界と交流



していくということを試みている学校がある。SDGsなどをキーとしながら、教育活動に取り入れていることは、素晴らしい視点であると感じた。

- 多様な子どもたちの中には、生きづらさや学ぶことの困難さを感じている子どもたちもいる。一定の棲み分けも大事だが、フレックス学園構想の考え方も取り入れながら、1人1人に応じた速度で学べるようなことが望ましいと思う。教育の公平さを語る話として、身長の高さの異なる人たちがブロック塀の向こうの景色を同じように見られるように、それぞれに必要な高さの踏み台を用意するというものがあるが、そのブロック塀そのものを取り除いてしまえば、それ以上に全員が同じ景色を見ることができるといえる。そうした少し大胆な考え方が、学校教育においても必要になってくるのではないかと思う。
- 学びの選択、学校選択において、この地域の子どもたちはここでの学びしかないということではなく、いろいろな選択ができるようになることよ。そうした学びによって、子どもたちが一緒にいろいろなことを高め合って、各地域の良さを世界にも発信していけるように成長してくれることよ。
- 高校と地域との繋がりに関して言うと、南部地域では通学範囲が広範囲であり、地域との関わりという意識は薄いと思う。
- 高校は自立する社会人に向けた最終段階で、行事などに協働して取り組む最後の場であり、心の成長において非常に大事な時期だと思う。通信制や単位制の学校を含め、選択肢が増えることが望ましい。特に通信制では、通学スタイルと通信スタイルが選べるような形は必要であると思う。
- 京都ブランドのようなものを打ち出して、全国から生徒が来るような形を考えてはどうか。また、北部地域で新たなモデルづくりなども、新たな発想として興味深い。
- 京丹後市の小・中学校においては、多様な他者との関わり、コミュニケーションが行える教育環境を整える観点から、複式学級の解消を目指して、少なくとも1学級の規模が20人から30人になるように再編統合を考えている。高校の状況とは異なるかもしれないが、一定規模が必要であるという視点は共通なのではないか。北部地域でも、子どもの数が減っていく中で、一定規模を維持することの重要性と、規模が小さくなることでの教育課題について、考えていく必要がある。
- 北部地域においては、1つの学校において学びに多様性を持たせるということが大事である。一方で、規模の確保とともに、通学の利便性等を考慮しながら検討していく必要がある。既に一部の高校の特定の選択科目においては、数人での授業となっている。高校教育の中ではもっと大きな集団で学ぶことが望ましいのではないか。
- 清新高校のような役割や機能を持った学校は必要である。一定程度の学校間での役割分担も重

要で、その中で多様な生徒を受け入れていく検討をしていかないといけない。

- たとえば北部地域でも、寮があることで、中丹・丹後地域間等での広域的な生徒の交流なども考えられるのではないか。生徒数の状況からも、様々な学科を置くことは難しいが、普通科の中に地域の特色とからめた学習ができるコースや、地域の担い手育成としての職業教育、探究的な学びを用意するなどの学びの多様性は考えられるのではないか。地域の小・中学校での特色ある学びを高校で発展させたグローバル・グローバルな学びや、地域の伝統産業と繋がる視点も必要ではないか。
- ◆経済産業省の方が「京都から発信するブランドイメージはある」と言っていた。たとえばICTをうまく利用することで、全国に発信できる部分がある。今後の議論の視点の1つとして入れておかなければならない。
- ◆北部地域も南部地域も、再編整備を考える際には、何か温かみを持った議論をしていくことも大切である。規模が小さいから一律的に好ましくないといった議論ではないということを、踏まえておく必要がある。
- ◆南部地域の学校規模としては、現場の実態を踏まえると、6クラスから8クラスは必要だという意見があった。ただ、北部地域では大きく事情が異なる。北部地域では、学校規模は限界のようにも感じる。また、通学の実態を考えると、再編統合を行うことで、子どもたちにとってのデメリットが際立ってくる地域もあると思う。そうした視点などについて、次回もう少し議論を続けていきたい。